

る。

以上本書の内容をコンパクトに紹介したつもりである。

評者も本書の出版よりやや早く『講座道教第五巻 道教と中国社会』の中で「民間医療と道教」というパートを受けもった。その中で期せずして本草が道教と深く結びられていることを述べた。『神農本草経』『神農本草経』（清、孫星衍『本草集注』『新修本草』『図経衍義本草』（『道蔵』に収録）の中でその記されている薬効から仙薬的効能を撰んでみた。するとその第一位は軽身であり、身を軽くして自由に天地を飛翔し永遠の生命を得る仙人への憶いが伝わってきた。仙人のルーツは羽人で、その身はやせ、軽く、翼があり、飛行千里というから現在の飛行機にその姿形は重なる。次いで不老、耐老、不夭、益寿、延年、益氣、耳目聰明、不飢などがつづきともに仙薬的効能をうたっていることが判明した。

本書は道教的見地から見た本草書の流れを紹介し、さらに附随してこれから生じた不老不死の願望から鉱物類の製造なども詳しくのべられている。

一読をすすめる所以である。

(吉元 昭治)

〔大修館書店、千代田区神田錦町三二二四、電話〇三―三二九五一六二三一、二〇〇一年六月一日、四六判、三〇六頁、本体一九〇〇円〕

#### 国際日本文化研究センター編

#### 『宗田文庫目録』

平成八年七月七日逝去された宗田一先生が長年にわたって収集された医学史、科学史、技術史、さらに絵画などを含む膨大な資料類が宗田文庫として国際日本文化研究センターに保存・管理されたのは皆様既に周知の事実である。保存される迄の経過には質において高い貴重資料を数店の古書店が購入の為動いたと聞き及んでいるが、センター設立当初から先生が専門とされた本草史、国学史、医学史の共同研究に携わり活躍された、生前の御遺志と、御遺族の献身的な努力により資料の全てが分散する事なく、保存されている。しかし何よりもセンターに保存されるに至ったのは、国際日本文化研究センター名誉教授、山田慶児先生をはじめとして多くの医史学者、センター内外の研究者の尽力による。

筆者は一昨年より平成十年九月に出版された『宗田文庫仮目録』（総五八五頁）を利用するためにたびたびセンターを訪問し、宗田文庫中の眼科史に関する貴重な文献を閲覧し、参考資料の豊富さに唯々感激し、多くの示唆を受けている。また宗田先生がお元氣であった頃、私が質問すると二、三日たてば数点の資料をコピーしてお渡しいただいた。今この文献を再び目にして、医学史の一部門、眼科史を紐解く際にも、非常に重要な資料である。宗田文庫は、科学史、技術史を研究されている人々、又後進の研究者にとっても文献資料の宝

庫と確信する。平成十三年三月国際日本文化センターより『宗田文庫目録』書籍篇、B五判総八一三頁が編集委員井波律子・栗山茂久・白幡洋三郎・早川聞多・光田和伸(委員長)・西川慈子諸氏により出版された。内容は山田慶兒先生の巻頭序の次に善本解題と題し、宗田文庫中「商人買物案内」川崎屋吉郎兵衛著、文政三年(一八二〇)をはじめ五十二冊の書籍表紙と内容の一部が、写真と共に書籍の内容を簡潔明瞭な書評をつけ紹介されている。解題には客員編集委員の遠藤正治・北川央・小曾戸洋・酒井シヅ・杉立義一諸氏がそれぞれの専門分野を発揮した執筆となっている。解題の中に筆者が特に関心を持ったのは点眼瓶の歴史に関連した酒井シヅ先生の解題、渋江虬鑑試・馬場貞由訳述『硝子製法集説』、眼科手術道具に関連したヤンコウエンブルグ(蘭)著、吉雄伯玄甫訳『和蘭内外要方』・刊本中に最も古い眼疾患名の記述を見る、小曾戸洋先生の解題、月湖著『類証弁異全九集』等である。

二〇〇一年正月明け早々図書館を訪れた際、机に向って黙々と宗田文庫の書籍に一冊づつ目を通しておられた遠藤正治先生がこの解題の為であったのだと、そして諸先生の宗田先生に対する思いと文庫への情熱が解題の中にこめられ、単なる蔵書目録の域を越えた書籍の一冊となっている。本目録の構成は、和書(和製本を含む)・洋書・中国書の各部に、書名索引・著者名索引を、ハングル文字による図書(朝鮮書・韓国書)は洋書の部に排列されており、和書は国立国会図書

館分類表(NDLC)を使用。医史学の分野のみ細部に分類されている。記載項目の順序は書名・編著者名・出版事項・形態事項・注記事項・登録番号・請求番号となっている。

なおこの書籍は非売品の為、多くの人々の目に触れ得ないのが真に残念である。

(奥沢 康正)

〔製作・中西印刷、京都市上京区下立売通小川東入西大路町、二〇〇一年三月二十一日、B五判、八一六頁、非売品〕

#### 内藤記念くすり博物館編

#### 『大同薬室文庫蔵書目録』

内藤記念くすり博物館の青木允夫氏から、同館に中野康章先生(以下敬称略)の旧蔵書約二万点約四万冊が入ったことがあったのは三年ほど前のことだったろうか。とうてい信じられない思いだった。なぜなら、中野康章の蔵書は昭和二十九年十月三日に広田書林によって売立てられたことは知っていたし、『日本古書通信』昭和六十二年八月号、一八頁「戦後大口売立表」、現にその蔵書印「大同薬室図書之記」が捺された古医書は矢数道明・大塚敬節先生や私の蔵書中にもあり、また今でも古書市場に出回り、完全に四散したとばかり思っていたからである。しかも小量ならともかく、四万冊も残っているなどは。しかし、先年同館に足を運んで視察した真